

かくめでたき事に、あきむねさせる道のものにもあらぬを、笛によりて召出されたるいみじき事といひけるほどに、大井川に舟樂の時、笛を川の淵におとし入て、えとらざりければ、龍頭に惟季笛をふく、鷓首には笛吹なくてえ樂をせず、人これを笑ひけり、いみじき失禮にてぞありける、始の面目後の不覺たとへなかりけり、今度の御會には、土御門右大臣源房序題を奉られけり、其詞云、

境近都城、故無車馬之煩、路經山野、故有雉兔之遊、とぞかゝれたる、歌もおほくきこえける中に、御製ぞ勝れたりける、

大井川古き流を尋來て、あらしの山の紅葉をぞ見る、通俊中納言、後拾遺をえらばれける時入奉りけり、

○按ズルニ、柱史抄野行幸ノ條ニ、承保以後無此儀歟トアルニ據レバ、白河天皇以降永ク廢絶セシモノナルベシ、

〔おもひのまゝの日記〕いつのころぞとよ、白河院承保の例に任て、大井河の行幸侍き、鷹にかゝづらふずる身、左右の大將をはじめて、いとめづららかなる事なれば、けふをはれといろくのそめ、まやうぞく、からやまとの色あひをつくしたり、御みちには都よりさがのまで、秋の花紅葉をわざとこきちらせるにしきのうへをあゆむ心ちぞする、左右の鷹飼かり衣のすがたいとおもしろし、をりしもうち時雨たる雲まの夕日に、こがね色なるきじのたちのぼるを、いとまろきたかのとりてほうれんのうへにゐたるさま、延喜酬の白せうがふるまひもかくこそと、いとえむにめも心も及ばずぞ侍る、大井川のせうえうの和歌序は、左大臣たてまつる、承保に土御門の右大臣の名句どもかゝれたるにもなほたちまさりて、世のもてあそび物、人のくちずさみになり侍りける、むかしはつねのことなりしを、天神菅原道真なども申とゞめさせ給ひしかば、まねな